

巻頭言

2020年はすべての人にとって激動の年として記憶されることになるでしょう。重苦しいニュースがあふれ、だれもがかつて経験したことのないような空気がたちこめました。このような困難なときにあっては、前向きな思考や、真に大切にすべきことを可能な限り追求していく姿勢が常にもまして求められます。言語や言語教育に関する研究は、このような状況下では差し迫った問題とはみなされないでしょうが、この分野の研究に携わる者たちにもたらず恩恵を考えれば、その価値を過小評価してはなりません。だからこそ、ここに9編の論文からなる『APU言語研究論叢 第6巻』をお届けできることをうれしく思います。

羅華氏の論文は、中国語の3つの可能表現「能、会、可以」を取り上げ、その効果的な教授法の構築を志向しています。初級の学習項目でありながら、使い分けの習得が困難であるという言語教育における基礎的根源的な課題に正面から取り組み、文法的な意味を問い直し、そこに新たな知見を加え、膨大なコーパスと学習者の誤用をつぶさに検討し、新たな教授法の提案を試みました。その言語教育に取り組む真摯な姿勢は、言語教育に携わる皆に力を与えてくれます。

張文青氏の論文は、中日二言語間の二字同形類義語の音韻類似性について、日本語母語話者を対象とした評定を行った優れた資料を提供しています。中国語上級の語彙2500語の中から二字熟語の同形類義語808語を抽出し、18名の調査協力者の評定の結果をまとめ、資料として提示しました。日本人中国語学習者向けの同形類義語の基礎データとなるこのような研究はこれまでになく、今後の語彙研究の発展に貢献することが期待されます。

JUNG氏の論文は、ICTを活用した韓国語教育について、韓国語CALL・MALL研究が本格化した過去20年間の研究の動向を概観したナラティブ・レビューです。レビュー論文は、著者の恣意的な論文選びや主観が大きく反映されてしまう可能性が問題として指摘されていますが、本稿では従来の研究を網羅的に取り上げ、主観に偏らず、ICTを活用した韓国語教育に関する研究の様々な方法や視点が提示され、世界的にオンライン授業化が進んだ2020年度の第6巻にふさわしく、言語教育の新たな展開を示唆しています。

寺嶋氏と板井氏の論文は、コーパスツールを使った実践を分析した貴重な論考です。情報通信技術の発展は言語教育にも大きな変革をもたらしていますが、新しい技術を有効に取り入れるためには、それを使う教員や学習者の技術の習熟が必要です。筆者らは、優れたコーパスツールユーザーを育成するための教材の作成をめざし、試作した教材を使ったワークショップを実施しました。ICTの活用法については、さまざまな実践がありますが、使用する側の技術の向上に着目した点が本論文の独創性です。ICTと言語教育の今後を期待させる意欲的な論文であり、これからの言語教育の発展に寄与するものです。

稲田氏の論文は、非母語話者日本語教師のキャリア観について質的調査をもとに丁寧に記述した佳作で、非母語話者日本語教師のキャリア観の変容をとおして、日本語教師の多様化を描こうとする意欲的なものです。寺嶋氏・板井氏の論文やJUNG氏の論文とは異なる視点で、変容する社会における言語教育の姿を映し出しています。社会の多様化が進むなかで、葛藤する日本語教師の姿は、母語話者至上主義の言語教育に一石を投じるもので、これからの言語教育のあり方を深く考えさせられます。

桐澤氏の論文は、対話型美術鑑賞法の一つであるVTSを言語教育に取り入れるという画期的な試みを実践し、その効果と課題を探究したものです。美術鑑賞法という、一見、言語教育とは無関係に思われる分野の教育手法を言語教育に援用するという意欲的な挑戦ですが、言語教育における「見る」という新たな技能の必要性が説得力を持って語られます。実践者の言語教育に対する熱意が学習者に伝わり、有意義な実践であったことがうかがわれ、これもまた言語教育の新しい息吹を感じさせてくれます。

矢津田氏の論文は、近年、関心が高まる分野である変容的学習理論にもとづき、学習者の変容体験を論述しています。本研究は、日本の大学の交換留学生を対象とした小規模なものではありますが、さまざまな研究方法があるなかで、言語教育において文化的知識をいかに育むかという視点を含む言語学習の変革的側面の研究に関し、再現可能な研究法を提示しています。この論文は、学習理論、評価法、異文化間コミュニケーションに関心を寄せるすべての人にとって非常に興味深いものとなっています。

Andrew McMahon氏の論文は、矢津田氏の論文に通ずるものがあります。この論文は、Global Englishに着目した言語教育プログラムの開発と指導法について報告しています。言語はだれのものかという意識を醸成するという観点から、学習者の経験の省察とグローバル社会におけるノンネイティブ英語話者としてのアイデンティティの考察をとおして、プログラムが学習者に与える影響を描き出しています。本論文は、学習活動に関する実践的な提案だけでなく、Global Englishの視点の教室への導入という点でも有益なものです。

最後に、Paul Seigny氏ら4名の共著論文、言語教育におけるティーチングアシスタント(TA)プログラムを徹底的に再検討し、作り直す過程を報告しています。この論文ではTAシステムにおける課題を体系的に識別し、それらに対処するためにどのようなことを実施したかを詳述したうえで、その成果を評価しており、同様のシステムの構築に携わるすべての人々にとって非常に有益なものです。Seigny氏らの論文は、TAプログラムの構築をとおして異文化間能力の育成について検討するもので、矢津田氏、McMahon氏の論文に共通するものがあります。

最後に、APLJ第6巻の執筆者すべてに心から感謝します。本巻に掲載された9つの論文は、言語教育センター(CLE)の教員によるものですが、これをみるだけでもAPUにおける研究の力と、研究分野の多様性が如実にわかります。

今、私たちはだれもが、2021年が新たな始まりの年となり、以前とまったく同じではないにしろ、日常の生活が戻ることを望んでいることでしょう。

2020年の逆境が、これまで、そしてこれからのAPUの教員による新たな研究への刺激となり、これをきっかけとして生まれた研究の成果が、今後の『APU言語研究論叢』のページを彩ることを待ち遠しく思います。

APU言語研究論叢 編集委員長
Steven Pattison
APU言語研究論叢 前編集委員長
本田明子